

中国のほんの話(38)

中国の怪奇小説

(その式)

蔭山 達弥



いささか手前味噌で恐縮だが、筆者が中国の怪談に興味を抱いたのは、関西大学大学院博士後期課程在学中（1985年4月から1988年3月）、わが国における中国怪異研究の第一人者であられた澤田瑞穂先生の『中国文学特殊講義』を受講する僥倖に恵まれたからである。澤田先生は毎週、琵琶湖のほとり膳所の地から、吹田市千里山のキャンパスに来られ、ご専門の中国民俗学や中国の幽鬼や妖怪の話をも、実に面白く話して下さった。日本の推理小説がお好きで、その飄々としたお人柄は今でも筆者の記憶に鮮烈に残っている。澤田先生の著作に『修訂鬼趣談義』（平河出版社、1990）がある。同書は中国の幽霊と物の怪にまつわる怪談をさまざまな文献の中に博搜し、民族的・宗教的な解説を付した一冊であり、中国の怪異譚に興味のある人に必携の図書である。これまでの既訳の志怪からの抜書きだけで成り立っているようなものとは一線を画し、未訳の膨大な文献の中から、著者が選び出してきた数々の話が本書に収録されているのである。幽霊や妖怪は、時の人心の喜怒哀楽を写し出す鏡であり、その究明は中国の文芸・宗教・民俗を理解するに必要である。中国人にとっての幽鬼とは何か、個々の怪異譚の淵源は何かといった視点に同書は貫かれており、文学的研究とは異なる魅力に溢れている。尚、澤田先生の驚異的な博引傍証の秘密については、季刊『幻想文学』第44号（1995、アトリエOCTA）にインタビュー記事があるのでそちらを参照されたい。"きんぼうげ咲く晩春（おそはる）の／園のふかきを歩みては／神の狐の妖魅（まどはし）に／昏（く）るる一日もありとこそ"（澤田瑞穂、詩文集『憶燕集』より）

さて、澤田先生も『修訂鬼趣談義』のなかでしばしば引用された書に、18世紀中国の詩人・袁枚（えんばい、1716～1798）が書き上げた志怪（怪を志す）小説集『子不語』がある。袁枚については詩人アーサー・ウェイリー（Arthur Waley, 1889～1966）の'Yuan Mei, Eighteenth Century Chinese Poet'の邦訳が『袁枚 十八世紀中国の詩人』として平凡社東洋文庫（1999）から、出ている。袁枚には羅聘（らへい、1731～1819）という友人がいた。彼は妖怪や幽霊の絵で有名だった。袁枚は、鬼神を描いた羅聘の絵に詩を題している。"いま、怪談を集める仕事をしていて／その題を『子不語』としたよ。／さて、君の鬼神画を見て、大いに悟った／鬼趣というものの／ほんとの怪しさ恐るしさというものを／ここまで深く知るの、今の世では／君と私だけなんだ、とね"（『詩集』巻27、『題兩峯鬼趣図』三首之一）

袁枚の膨大な量にのぼる志怪小説集『子不語』は、『論語』述而篇の「子不語怪力乱神」（子は怪力乱神を語らず）にちなんで付けられた。この書には我々が言う意味での怪談が数多く収められているが、あらゆる種類の異常な体験談も散見され、各巻の冒頭には「随園で戯れにつづった」（随園戯編）との文字がある。一つ二つの例外を除けば、袁枚の記す怪奇譚は、現実の心理的な体験の記録であるように思われる。それは、袁枚が友人や同時代人から聞いたものであり、場合によっては彼自身やその家族が体験したものである。（『袁枚 十八世紀中国の詩人』より）澤田先生によると、袁枚は妖怪学については異常に熱心な研究家で、戯編とは称するものの、『子不語』および『続子不語』の両書には幽鬼妖怪変異の談が満載されていること、人の知るところである。特に僵屍（キョンシー）については両書を通じて二十条近くを数える。「僵屍は昼は棺の中に横たわり、深夜に出歩く。しかし、棺の上蓋が失われると、屍はもはや祟りをなすことができなくなる。ある豪胆な男が、屍が外へ出たのを窺って棺の蓋を取って隠した。夜更けに潜んで見ていると、屍は蓋が失われているのを見て、慌てて探し廻っていたが、鶏が鳴くと、バツタリと路傍に倒れたという。」

かげやま たつや（教授・中国文学）